

戸前
善界
光寺
通小町
天穀

其



戸ノ

古三都の道 あき 離波乃

うと尋々 か 極みの去ハ都

去御方おはへ申者あてのふきよ

はるちうの頼ちうのふ人乃若子芸

御乳乃人あきと者御軍を津國

きうめ軍あきと今一度はりある

力に今も此所には所ある
あつたやんげ由と申す

と申すやうに申すは所殿を

尋中て久しう今に所は所ある

中作と并に和字や家あるてハ親習

と申すは所ある古く

やうに申すは所ある限る所

と申すは所ある有様外去

うと申すは所ある有様外去

習留は所ある所ある

思ふは所ある所ある

逗留は所ある所ある

と申すは所ある所ある

浦は所ある所ある

三

カケリ
立舞市
めずとふ

一 前へあるものを受くる人界
と云ふ所あるも又栄花の家
もこの世にさぐりて貧乏なる
前へある戒めを拙き心をも
おとちりもあつた行急眼
起るをさるあつた又かく
海濱の牧場のげん命を

つひとある露のちの葉に
声の人と成るわうア
難波のうへに出るやれ
日とてあるも上りた
うへにありてくびく
中へあるや終るやな
社財のありての雲井の

穂^ホは^ハお^オの^ノき^キの^ノ尾^ビに^ニも^モつ^ツお^オう^ウ

梅^{ウメ}の^ノ名^ナを^ヲ可^カよ^ヨう^ウと^トて^テお^オよ^ヨ

中^{ナカ}の^ノけ^ケを^ヲ待^{マテ}た^タ人^{ヒト}を^ヲ

海^{ウミ}の^ノ森^ノに^ニお^オく^ク人^{ヒト}を^ヲ

ふ^フし^シや^ヤ海^{ウミ}の^ノ浦^{ウラ}の^ノう^ウ

く^ク見^ミえ^エと^ト出^デる^ルさ^サの^ノう^ウ

昔^{ムカシ}も^モあ^アれ^レを^ヲ假^カし^シ入^イる^ル命^{イミ}に^ニま^マ

や^ヤう^ウな^ナ言^{コト}を^ヲし^シて^テい^イ市^{イチ}に^ニお^オく

う^ウね^ネの^ノう^ウを^ヲて^テる^ルま^マの^ノう^ウ

う^ウね^ネの^ノう^ウを^ヲて^テる^ルま^マの^ノう^ウ

う^ウね^ネの^ノう^ウを^ヲて^テる^ルま^マの^ノう^ウ

う^ウね^ネの^ノう^ウを^ヲて^テる^ルま^マの^ノう^ウ

う^ウね^ネの^ノう^ウを^ヲて^テる^ルま^マの^ノう^ウ

申^{ウケ}の^ノ梅^{ウメ}の^ノ濱^{ハマ}に^ニお^オく^ク

天^レ水^レし^レ津^レの^レ濱^レ津^レ社^レ在^レる^レありて^レん

ゆ^レも^レあ^レりて^レ傳^レふ^レありて^レん

あ^レり^レ何^レも^レな^レや^レけ^レり^レ何^レと^レく^レ御

津^レの^レ濱^レと^レい^レふ^レ尋^レぞ^レ永^レく^レも^レ仁^レ德^レ天

皇^レじ^レま^レる^レの^レ浦^レ大^レ宮^レ作^レる^レなり

御^レ津^レと^レい^レて^レる^レの^レ濱^レと^レい^レふ^レ也

定^レむ^レる^レを^レ謂^レふ^レ皇^レ居^レる^レ浦^レ

あれ^レは^レ津^レ津^レと^レい^レふ^レあり^レあり

あれ^レは^レ海^レと^レい^レふ^レ大^レ宮^レあり^レは^レ濱^レ村^レなり

も^レ無^レ火^レと^レい^レふ^レ木^レの^レ裏^レ雲^レ井^レの^レなり

へ^レり^レて^レる^レと^レい^レふ^レ月^レ御^レより^レ下^レ萬^レ民

の^レ民^レ同^レ也^レも^レ有^レ秘^レと^レい^レふ^レ惠^レと^レい^レふ

登^レあれ^レは^レ祭^レと^レい^レふ^レの^レなり^レあり

と^レあり^レ網^レ船^レの^レあり^レあり^レあり

そや 名ふまほふあはれ津のく
きりし大交のぐらきあひびき
もあはれと唱ふ海士乃よひ色と
讀むる古きともしく細の目乃前
まへえたる有様の事し御説人きよや
くく 面白や心ありしあはれ人きよを
もはけり余の難儀よりぬき乃

きりしほろ舟ありしあはれ仲の路
破子鳥づつらてあはれや海士乃舟
あはれ 雨よきくぞきつのも
あはれ 病もまじきあはれあはれ
えん 朝取津乃まじきあはれ
あはれ 梅の花うさ ねてぬ鳥の翅え
や 静しき乃 月乃あはれ袖き

以行爲主
此爲公
出
入

あうさやぶうの戸うる男の姿を

げいしきしきあつそ ^こ 今き付

きつしあきふまきあての戸うお

人きうふく人あて ^{トせん} 作是くま

あきしきあき ^半 言語を断つ

けうきうてくあきうぬ事う

きりうてしきあき ^半 作あき

あきあき ^半 作あき

あきあき ^半 作あき

あきあき ^半 作あき

あきあき ^半 作あき

あきあき ^半 作あき

あきあき ^半 作あき

あきあき ^半 作あき

あきあき ^半 作あき

ちまこつちとて妻つてざとて
 ねたれを言ひてう便れ
 名中
 親戚津まきやけりきもあへ
 書くとてや洗祀とて入給ひき
 に徳天皇とてさるるに
 波の所子乃さう又あさう山
 ねたれ家女の血おあへ恨とて入

ちまこつちとて妻つてざとて
 ねたれを言ひてう便れ
 名中
 親戚津まきやけりきもあへ
 書くとてや洗祀とて入給ひき
 に徳天皇とてさるるに
 波の所子乃さう又あさう山
 ねたれ家女の血おあへ恨とて入

津乃國志あるまじき事多し
戸れ枯葉の如きものなり
李ももあはれなるものなり
廣くあはれなるものなり
道づつとあはれなるものなり
下づつとあはれなるものなり
有る契りなるものなり
縁なるものなり

きれいふ申はてきり一り

御舞久しきなり

てふ人なり

ま油のさうり

新紋のさうり

あはれ月ものさうり

はるふれさうり

今^{ナニ}ち^ニ去^リつ^ニて^ニ勢^ニろ^クろ^クに^ニあ^リま^シけ^ルや^ニ
大^ニ伴^ニ乃^ニ津^ニ津^ニ表^ニう^ニる^ニま^シけ^ルを^ニ
契^トう^ニよ^ニか^ニえ^ニる^ニさ^ニう^ニさ^ニう^ニの^ニま^シき^ニ

善家

第^一云^ハ路^ニを^ニ去^リく^ニ様^ニれ^ニ空^ニく^ニあ^リる^ニ日^ニの^ニ
本^ニと^ニ素^ニ々^ニ是^ニハ^ニ大^ニ唐^ニの^ニ天^ニ狗^ニ表^ニ
首^ニ領^ニ吾^ニ東^ニ房^ニう^ニく^ニ山^ニお^ニも^ニ我^ニ國^ニの^ニ
と^ニひ^ニく^ニ育^ニ玉^ニ山^ニ青^ニ龍^ニ寺^ニ聖^ニ若^ニ主^ニを^ニ
至^ニる^ニま^ニて^ニが^ニも^ニ慢^ニ心^ニ乃^ニ智^ニと^ニハ^ニ皆^ニ我^ニ
道^ニの^ニ後^ニの^ニき^ニひ^ニと^ニ云^ニふ^ニあ^ニ城^ニや^ニ日^ニ

善界

本彙散ス遍ス地スのス小國あり邦國

とて仏法うよむある由歟及否問

意は日本に渡りて法を講ずる也

モロと存
ウヤ
多
好
豊
芦

原の國津ツクウ。青ウあウちウよ

市もあつた

事也秋津嶋根乃朝開ウロるイ所イを

あまのつゆの日に
あけぬ国を
あはれむ

よく
義山
福よ
是
高
也
日本
に

坤子字子安

立部と弟房は素内をうさめと

夢をみるや電宕山をうきふ山

乃安來てて是より我に住へり

可きとへあはきふ
可きとへあはきふ

心太帝坊

海のそ^テは^テ大^テ唐の天狗のそ^テ領

吾東房のそ^テは^テめ^テのそ^テ後

ま^テ子^テ細^テ乃^テひ^テて^テ是^テは^テる^テく^テま

ま^テの^テ備^テのそ^テひ^テる^テ吾東坊

ま^テの^テ唐^テのそ^テは^テ果^テが^テ菴^テ室^テへ^テ入^テる

め^テる^テう^テそ^テ行^テの^テ馬^テの^テま^テは^テお^テま^テく^テ作^テそ

ま^テの^テ山^テの^テま^テる^テ事^テ入^テま^テの^テ海^テの^テま^テる^テ人

我^テの^テま^テる^テて^テ育^テ玉^テ山^テ青^テ龍^テ寺^テの^テ最^テ若

聖^テの^テま^テる^テ道^テが^テそ^テ慢^テの^テま^テる^テを^テ皆

我^テの^テ道^テの^テま^テる^テま^テる^テと^テら^テる^テあ^テる^テ城^テ也

日本^テの^テ小^テ国^テあ^テれ^テた^テ神^テ國^テと^テて^テ佛^テ法

今^テの^テま^テる^テま^テる^テ也^テ承^テ回^テ少^テの^テま^テる^テ無^テう

遙^テく^テま^テる^テま^テる^テて^テの^テ國^テの^テま^テる^テを^テま^テる

つ^テま^テる^テ自^テ便^テの^テ本^テ意^テを^テ達^テし^テて^テ終^テる

諸^レもやうくも思^レ食^レまの如^レ水^レ支^レ神
國ハ天地開闢より此方ぞハ邦國^ハ
されハ後法^ハ今^ハより^ハやんある^ハぞと^ハまを^ハ
比叡山^ハあまきこそ日本^ハ乃^ハ天台山^ハ作^ハ
^和乃^ハま^ハより^ハ何^ハひ^ハ給^ハへ^ハ 法^ハより^ハ便^ハ
あ^ハま^ハぞ^ハ天^ハ台^ハの^ハ法^ハを^ハ檀^ハ室^ハ二^ハ教^ハの^ハ如^ハ
又密宗の奥義^ハと^ハつ^ハへ 顯密義學

れ^ハあ^ハる^ハを^ハ 神^ハより^ハ此^ハの^ハ類^ハひ^ハと^ハ
た^ハも^ハより^ハ何^ハひ^ハ ^和給^ハへ^ハ事^ハ 蟠^ハ蛇^ハ
等^ハと^ハう^ハや^ハ猿^ハ猴^ハか^ハ月^ハは^ハあ^ハひ^ハた^ハあ^ハ
づ^ハく^ハあ^ハれ^ハも^ハあ^ハる^ハや^ハ我^ハ慢^ハ増^ハ上^ハ慢^ハ
心^ハの^ハ便^ハを^ハえ^ハん^ハと^ハ思^ハつ^ハる^ハも^ハお^ハろ^ハの^ハ威^ハ
力^ハと^ハい^ハよ^ハく^ハあ^ハる^ハより^ハより^ハより^ハ
明王^ハの^ハ誓^ハ約^ハま^ハる^ハく^ハ成^ハと^ハる^ハた^ハ其^ハ利^ハ

蓋よろじよこえどく火生三時
入経一切乃魔軍と焚焼たり
外方及多無乃相をきんむとく
内心慈悲の法惠凝む不動の理を顯
但主心空に起る中実有移り
悲願うれしや然るをいふを輪廻乃
道を去ちて魔境よりつじ其歎き

思ひきりまや我ありき去きし乃
何より見仏の法乃其縁起一切
より三要道を出あり尚て冤畜乃
身をかりきりて仏敵法敵とあり
あきまふ今此を歎くはる未だ
庭うくをみるもつら寂然の智
世をえて火生三時の焰を過きしつ

上テテ
夢さへ夢中へ夢さうつらうも
夢さへいふやう雲のうらみ迷ひを
うへへ帰服きことと思ひていふく
我儘の旗矛れあひもやうさう
よ行者の床を何ひく降魔の利剣
をゆへそつれうりまき
刻うつあひたもろ共よさきて比叡

上テテ
古手太邪

乃山さうちうへまは法れあつぬそ
光定山れちよ頼を無く思ひう
雲のうきううう儼り我名やうそ
高雉山東とみまは火ひえや横行
の板れ梢より南よつるを必きう嶽
鶴乃お山の雲や霞も尻と共よう
きまきく
中僧上
勅をうあ我う

仙をいさうきくも同一名またふ
 大内山の道ある かつてやうく大
 比叡をあらつて行多う ちやあまきよ
 みしたるより松乃 梢の月吹志ほ
 里くも雲とあり雨とある 山行多
 本震動し天よかやくいふり大
 地よりく雷を肝鬼とくぬん

二六も何れゆやうく 柳是
 大唐天物の首領善界房と我
 乃也あゝあゝしやあゝ所房へう更
 何乃観念をうあたる 若作障碍
 即有一佛魔境と祝里あゝ痛りや
 欲界めうらまき 地 悟り乃
 清や具まゝは魔道のちまゝと成ぬ

乃良のまはるゝかまゝ
来りさうきくがはるゝあ
佛力カ人より強ひあまゝと
づきさうり八尾さうあまゝさうり
宝宮よのこつとあまゝ雲路よ入よ
まゝ

芭蕉

馬

是ハ唐土我國あつゝさうひと
中阿よ山谷さう僧さういねも秋
法華持經乃あれハ日ハ朝言飯
中經を讀なりいといふ今も秋
もあつゝ月乃さういふさうさう
あゝ安よさうあつゝ事乃ハ山

中よわきまゝて又伯者とあふな
ぶめく讀經乃打節度室のあふり
ふ人のせとあひ園いじとおそま
てうめあふ成者うと名を尋りもと
思ひ作サレ既サレ夕陽西よりつりば
わう乃陰冷しうて鳥の毛色よ
おすこは上テ夕乃空もほろく

あふく月よなやう山陰めさく
まくとあふ染乃戸よげし經を讀
誦トもくト芭蕉トなちく松乃
色サレくあふ凡乃破さす
凡サレもううそひく燈さやもく月
うわくさうわうて養ありかた秋
乃トひう所わくもの冷き山陰

結縁をまひなりなすどもても縁を
たしまつてもれは行なり今も
かりぬ言の成業乃度よりうらを
露乃まありと去のため結縁は
名を給へとも 半日 定は乃結縁ハ
誠は妙ある清事あれなりあり
なりとありあり人乃清事よいて

お宿をまつひつふ 女 其は乃いふ

事あれは御前人あり我もま
もみりち愛うきひの 半日 ちあ
あれをゆきたよきぬ他はえん
うれ 女 一樹乃陰の 半日 菟乃うら
ま 上 月もかりぬの露乃宿く
行もつふほもする寺の愁ハ崖寺

れさる破もたよりかき山行のぶ
ふまゝの月影もさす
やうらひ蘭省の花の時錦帳
乃もなづえん乃雨の草店乃
ゆゑ思ふわ
經讀誦れ程内へき入く乃肉へ
まりへあう方経や此中經を聴き

トを我あきとき乃女人非精草其の
たぐひ造も頼もう社久
は聽國人おわたり念隨花乃信たあれ
も一切非精草其れたるまても何
乃さうひのふき
乃草其成佛乃
志ありて
薬草其ありて

をさるきびとあひかゝるはを
 りともいふ思ふん
 あひうも疑ふやれ人界を
 やうとわねほと覺え
 けぬ道ちやうも照月の影さあろ
 庭の面の宮に平の芭蕉のいつた
 姿乃まこととみてもつめと

今^今の^今色^色諸^諸行^行無^無常^常と^とあり^{あり}ま^まき^きり^りく
 朽^朽ち^ち空^空ろ^ろう^うれ^れも^もき^き成^成の^のい^いら^らハ^ハき^きる
 海^海と^とい^いま^まう^うへ^へ疑^疑ひ^ひあ^あら^ら色^色蕉^蕉の^のや^やと
 あ^あら^られ^れき^きる^るそ^そう^うき^きあ^あれ^れ 上^上手^手
 法^法の^のき^きる^るう^うと^とウ^ウく^く思^思へ^へい^いと^とも^も
 も^もか^から^ら月^月も^も妙^妙あ^ある^る法^法の^の場^場内^内の^の色^色蕉^蕉
 や^やつ^つら^らん^んく な^な下^下女^女あ^あら^らわ^わも^もこ^この^の底^底

女
記

其法を審る所ありやまうけうけう

めあうね
去も草木も雨

より
うれめくを妻あう

神志乃精非精也

うらなふとありや
いもあ

あ、
女三下、
上
あ、
あ、
あ、
あ、
あ、
あ、
成

よ色蕉乃。女の衣はうひ色の花うめ

あめゆめはちみつや

支那精要といつて、
破ハ無相真如

乃狹一塵法界乃心地ハツのうへより雨露

霜雪の
かろ
を
る
あ
る
は
枝

乃花をりき。所法乃色をあふい。

一花ひろきて四方にまきのとけふを

目影をえく楊梅桃李すくの

色香よある心まで諸は空相隔も
あけ氷もちつと樓臺まつ月を
うらあり陽よむらぬ花をばまよ
あつやもさある其ころりも様
のうめ乃前よ様ころやあまの夏
たき秋ころ風の音信を庭にあさる
をさよまころりもあまの秋あり

わが古寺のけし草あつともしといふ
へそ花を風乃まよのさき蕉葉を
ろくも落ぬ露のさへさあ
虫の音のよもまよころ心の秋と
てもあまが替りんや思へ空め
あまのさき芭蕉葉乃夢の中
めちりあまの秋ありあまの秋あり

つるさ乃山あまきと月あふり侍ひ
 ぬるちの乃音起しききふ
 海原あつよおち立まふ袖あふ
 ちやうへんこようひき月もあふ
 衣まう乃衣あものちやうへ
 霜乃そあふのぬきさうぶあ
 草の秋もあふのぬきさうぶあ
 草の秋もあふのぬきさうぶあ

乃羽衣あれや
 うきをうき
 蕉乃あつきの乃
 寺乃庭あふちぬきさうへ
 ちやうへんかきさうへん露のまふ山
 ちやうへん松乃を吹さうへん花も子
 花もちやうへん花もちやうへん花も

あはれも芭蕉やまきて跡りきり

通小町

早河

是より八瀬乃山軍より一夏を待つ

僧より作家よりつともを待つ

人毎日より所を待つ

作じ日もあつてつらう

名を尋ねると思ふ

もたきわつく白きぬ神を待つ

義しりし花さるゝあつ
 一枝く このさきうもくハ 愛ぬ
 抄しりしあつる人うあをい名
 棄る れう ちあつるを 小野
 といひ 市原 形とて
 とも 市原 形とて
 といふ 市原 形とて
 といふ 市原 形とて

かつある事社よりとて乃女性
 の名をとりて尋て久保野と
 いふ薄生つる市原野より母を祖
 母とてつこきやうは失て伝へ
 らるあはれなる人市原野を
 通る一村生る長よりも
 村人の吹よきてもあつて小野

さいて一箇ぢききうとありふれた
のふ町乃手也倭ハ疑ふ所もなく
又うれ女性ハ野小町の幽霊と思ふ
程ハ彼市原邸よりこどもら乃邸
を吊りつやと思ふ
を立ちくぐりて草すく露をま
き市原邸人よ事ねゆ
其具をのく

音とたま南無無幽霊成ホ正覚が離
生死の言を提
とつてわも同く
僧 いやあま
恨入もやゆたま
いさるあく
患をふまき
かろりみるたは

あまのふた一人佛道あるはわ
思ふたふかひのふた衣がふく
さめを三頼りて流るるてあけ僧
乃ちふきへるひも方まだやぬ
王給や清僧より上高其方の
朱ふもお戒力ふいれおとい
首あふるをお戒よりも受へ

人ふ心まゝ雲乃我のふり
月あふ僧よとつねと流る
口もふきれおつやとわきもあふ
あふおまねうへとぬき
あふおふき山乃もまおあふく
らふとぬきまおハ煩惱
ややあふおふくやとぬき

^世は^新才^和ろ^日の^{シテトニ}海や秋をどく^和も
ひめ袖も^天いづる^{日又元二下乃}我れも
^まどもよ涙の露^ヤ深草の少侍^{甲府}撫ハ
小所小町四位表サおきくるまゝ
ちや進乃り車乃榻ふ百使通云
一書をまあつくはみそ久^和と^{女上}
より我々白雲がわね味むらなる

音お痛くも偽をも誠と思ふ
 暁にも君ひ車乃ちよりきは
 和モ 車のおろもつまやなをうよと
 亡 心しえ 車は云なるん
 いづる思ひち 山城の古橋の雲より
 あれた 君と思へからた 相そ

乃つてを滅して小所の小町を
得も其の佛道ありと云く

天報

是ハ唐後漢の帝は位を居下也

抑も此國の傍に王伯王母とて其城
乃老翁彼者一人其子をとりて其名を
天報とあつて其を天報と名けり
其の母は母中より天よりあつて
其降くると胎内に宿るとみてかま

あつて子あれはとて母名を天朝と
とて母は天より滅の報なりとて
てはとて母はとて母人感を得たり
此由帝國に報を内裏より
報深く憎む報と抱き山なりは隠ぬ
れはつくりま地あるぬは官人をもつてさ
のあつてとては呂水乃江よまつめ報

と内裏より報に唐殿雲龍閣より
責れとて又も及報をとりま
れは更なるなりあつて様まの
款きあぬと思ふと向彼者の父王
伯とて打ちとて乃宣旨は
伯人王伯の私事とて夏
世は若者の事とて又洗

^{ニテ}宣旨といふ意思のようにもあるやうに
 爲すそ ^守 諸人天敵の教に裏よる
 誣く及ぶをわきまめられ更にあら
 うぢぶる様主乃 ^又 爲すをきけい
 めと思ふ所同王伯よりあらはせし
 宣旨の方よりあらはせし衆内は
^{ニテ}信じて承りし去ある勅命またある

ぬ戦の考へしありてうらたきこと
 何よ色のあへるやうに是も
 う勅命を背り老の父あれど
 て失われし爲すう有誤なり
 それに力あり我子乃爲し失は
 ずれ社友の望みも甚しく
 うありて ^上 極の宣旨あり

[illegible]

雨乃^レ地^ニを^レほ^レす^ル増^スる^ル衣^ヲを^レ恨^ム
そ^ノも^レ思^フひ^ノあ^ハせ^テ又^モ深^ク母^ノを^レ罪^ノ科^ス
命^ヲあ^ハれ^テや^ハ明^ニ暮^ルの^ト時^ニ報^スれ^テう^ツた^リ
思^フれ^ルぬ^ガ社^ニ恨^ムを^レあ^ハれ^テ敷^キ時^ヲ
う^ツる^ルあ^ハり^テ涙^ヲを^レと^モと^モと^モ若^ク人^ノよ^ク急^ニそ^レ
報^ス打^ツや^ハう^ツそ^レは^ハ大^ニ志^ヲの^ト素^ニや^ハ
初^メ命^ヲ乃^チ友^ヲあ^ハり^テう^ツる^ルあ^ハり^テ急^ニと^モ報^ス

打^ツや^ハう^ツす^ルや^ハ若^ク浪^ヲ乃^チ急^ニう^ツ
影^ヲ夕^ニ月^ノ乃^チ雲^ノ龍^ノ乃^チ急^ニう^ツ
玉^ノ乃^チ階^ノた^ハま^ニの^ト成^ルは^ハ若^クの^ト歩^ヲも^レ
そ^ノより^テ薄^ク氷^ヲを^レ踏^ムと^モと^モと^モあ^ハり^テ急^ニう^ツ
あ^ハり^テ此^ノ報^ヲう^ツる^ルあ^ハり^テ急^ニう^ツ
心^ヲ耳^ヲを^レ洗^フ色^ヲあ^ハり^テ急^ニう^ツ
の^ト持^ツあ^ハり^テ急^ニう^ツ
中^ニあ^ハり^テ急^ニう^ツ

三才の理を
 一に統する者
 天也
 二に統する者
 地也
 三に統する者
 人也
 四に統する者
 物也
 五に統する者
 事也
 六に統する者
 法也
 七に統する者
 徳也
 八に統する者
 道也
 九に統する者
 天地人也
 十に統する者
 万物也
 十一に統する者
 宇宙也
 十二に統する者
 神明也
 十三に統する者
 聖王也
 十四に統する者
 賢臣也
 十五に統する者
 君子也
 十六に統する者
 小人也
 十七に統する者
 百姓也
 十八に統する者
 萬民也
 十九に統する者
 天下也
 二十に統する者
 宇宙也

戦うを沈め、呂水の境に所亭成
 て、同市天の藪をよこし、糸竹呂律の
 声よくばるをあらわしてある所
 を、吊ひしう有難きは、当初秋の空を
 まへ、早三休の夏たを、風一舞れ秋の
 空夕月乃ちも照るひく水溜る
 として、波得るなり、意なる経乃

市吊ひやあ物を背き一々罰めて
 呂水に沈うやうあれは母の
 苦みの海に沈る浪に打もて呵責の
 きめを際あう一思はる外乃に
 吊ひよ浮ひあくる呂水の曇るぬ
 よの有縁りよ 不思仙やあ早更
 るや面よぎうう入のみにる

なる成老そあを名葉 シテ 是へ天報

七ち成る吊ひの方縁さ見送頭

せしあうたる 甲虎 母も天報り亡霊

吹やぬるの音 樂れ舞あも天報

かき肉の敷ううて 具をむなうた

天報りあう成へりやく報を

はき 姪や儲の物院とむる月

ややく玉座のあり 玉乃笛の音

色はて 月宮音も かくやうり

天人も影向 雲降も 雲よ天降

まの動ふて 同々打あり 天の報

うらあひ 具持乃く 呂水のもあま

溜もく ありく 汀乃色れより

急竹の手向の 舞ふ有程や 面白

やすき ちき ちき ちき ちき ちき

色柳葉を 松つく 月も涼く 星も

あひひ 空あれや 鳥鵲れ 橋のたよ

紅葉を ちき ちき ちき ちき ちき

冷うは おもて 更て 夜更ふも ちき

人向乃 水 南星 ちき ちき ちき

天乃 海つち ちき ちき ちき ちき

天乃 海つち ちき ちき ちき ちき

堤の月も満き水も動き波もさうら
 袖をみてもや夜遊の舞樂も時
 五更の一点鐘もあり鳥さハ聲乃
 ほろくともおもしろさ時^の鼓
 教^のつれもさる色も又打響て
 うつ夢^のうきも打あてう^のか受^は
 ちろと^はありよまれ

右之本者觀世太夫織部
 章句真本令成行畢

正徳六^丙 申歲跡生

大保十一^庚 子歲孟春改正再板

皇都二条通御幸町西入町

山本長兵衛


